元の理の教会

御所ノ内地区の天理教分教会

1160030　大道　直紀
指導教員　渡辺　菊眞
高知工科大学　システム工学群　建築・都市デザイン専攻

1.はじめに

1.1.天理教について

天理教は、江戸時代の天保九年（一八三八年）、教祖・中山みきによって始められた。現在、日本国内を中心に、約一万七千の教会が存在している。信者数は二百万人を数える。

天理教の総本山は、奈良県天理市に位置し、人類始まりの地「ぢば」が鎮座している。

主神・天理王命（以下、親神）は、人間が心を澄まし、仲良くたすけ合いながら暮らす「陽気ぐらし」の世界を望み、教祖・中山みき（以下、教祖）の口を通し、その道を教えたといわれている。

図１．天理教本部

図２．天理教本部地図*1

1.2.天理教の教義について

1.2.1.天理教の三原典

天理教には「おふでさき」「みかぐらうた」「おさしづ」の三つの原典が存在する。「おふでさき」とは、天理教の教えの全容が述べられている。「みかぐらうた」とは、天理教の儀式で使用される地歌の書物であり、以上２つの原点が天理教の目指すべき世界となる。「おさしづ」とは、教祖などの口述の教えを筆録したものである。「おさしづ」は他の二つの原典とは異なり、教祖自ら筆を執り記した書物ではないため原典の中では格が少し劣る。これらの三原典は天理教の教えの元となり、今日まで原典として信仰されてきた。

1.2.2「元の理」と「泥海古記」

天理教の三原典によって記述されている教えの根幹に「元の理」の理念がある。「元の理」とは、人類創造の逸話を通して、人間存在の根本原理が明かされたものである。その人類創造譚の名を「泥海古記」といい、「おふでさき」に収録されている。

1.2.3天理教の活動

教えを達成するための活動を「ひのきしん」という。親神の守護に感謝を捧げる自発的な行為とされ、一日の働きをお供えするという意味が込められている。

その代表的なものとして、「『貧』の形」と「ふしん」がある。「『貧』の形」とは、天理教の教えのひとつで、余分なものを捨てきることで、心の執着を断つことである。「ふしん」とは、建設を通して心の成人を図ることである。

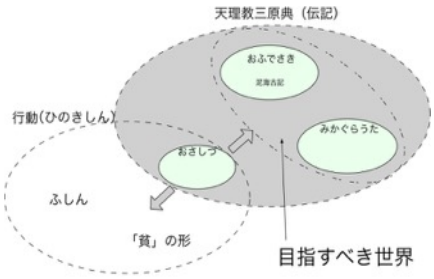


図３．天理教の原典の関係

1.3.天理教の組織

天理教には、奈良県天理市の天理教本部が存在し、次にあるまとまった地域を統括する大教会、その下部組織の分教会がある。都市部の分教会ともなると一般住宅に間借りしている教会も存在する。裾野の広がりが大きい分教会は、日本各地に数多く存在することから信者以外の市民により近い存在といえる。

2.計画に向けた問題の把握

2.0.天理教と建築

天理教本部は「ぢば」に向かって拝めるように作られている。中心にある「ぢば」が信仰の中心にあり、神のご加護を授かる場所と言われているためである。包括団体である分教会の場合でも、同様に「ぢば」を向いている。

分教会の内部空間は立教の頃より、一貫して中央に親神を祀り、左右に教祖、御霊を祀っている。規模の大きな教会の場合は御霊の他に教祖の御霊を祀る場も設けられている。また、教会内部の内陣と外陣の間には曖昧な境界が敷かれている。

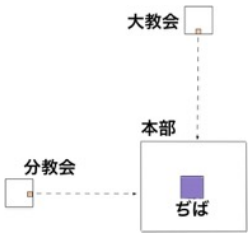


図４．天理教教会と本部教会の関係図

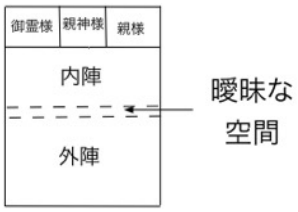


図５．天理教立教からの建築様式

2.1.天理教教会の付加要素

天理教の教会は信者の拡大と共に、その都度必要な建築が付加されてきた。現在は、付加されたものが原始にあったものを不必要に上書きし、その結果教義と教会が結びつかない事態が起こっている。その具体例として、入母屋、鬼瓦、千鳥破風などが例に挙げられる。

2.2.本設計の敷地の問題

本設計では、天理教上京分教会に焦点を当てる。所在地は、京都市北区御所ノ内地区の住宅街にある。また、住宅街だけでなく他宗教施設と隣接している特徴を持つ。

現存している建築は、分教会が設立される昭和二十五年以降、信者数の増加と住宅としてのニーズの多様性に応じて増築が行われてきたが、時代とともに不必要な部分も残されている。

図６．上京分教会

図７．上京分教会地図*2

2.3.本設計の課題

不必要な増築は、天理教の「『貧』の形」とは真反対の現象となる。そのため、本設計では、「『貧』の形」に基づき、必要部分のみを残し、余分なものは解体する。

2.4.本設計の目的

宗教建築は、その教義に沿う建築が相応しい。教会の内部空間もさることながら、その外観、造り上げられる風景そのものも教義を意識しなければならない。そのため本設計では、天理教の分教会に対象を絞り、教会としてのあり方を検証し設計することを目的とする。それは天理教に限らずすべての教会建築に必要なことである。

さらに、「『貧』の形」を掲げる宗教として、他の宗教建築とは異なる教会の姿を構築することを目的とする。教会が持たなければいけない地域のアイコンとしての建築と、宗教の理念として「『貧』の形」をもつ教会、つまり、華美なモニュメントとしての建築ではなく、不要なものを徹底的にそぎ落とすことを表現する。

3.設計プロセス

設計のプロセスは大きく二つに分類される。

一つは分教会として純度高い建築をつくることである。この空間は、天理教の原典から導かれるものであり、どの分教会も目指すべき空間である。

もう一つは御所ノ内地区に立地する分教会としてもつべき空間である。

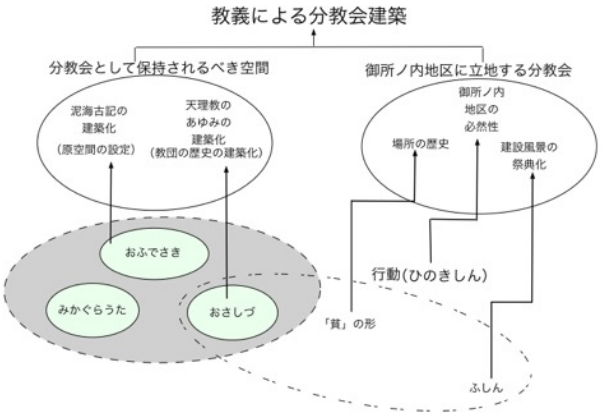


図８．プロセスと教義の反映の図

3.1.教義から建築を構築する

3.1.1.泥海古記の考察と建築化

泥海古記の概要は以下の通りである。

”この世の始まりは泥海であった。これを味気なく思った月日の神（親神）は、人間を創造し、陽気暮らしを実現することを目指す。まず親神は、泥海から魚と巳を引き寄せ、男女の元を作りだした。そのあと、フグ、ウナギ等の生物から特徴を見出し、元にそれらの働きを取り込んだ。そこから、ドジョウを魂とした人間の元を作りだした。その後、八千八度の生まれ変わりの後、最後に残ったのがメザルで、これが人類の祖先であった。”

図９．元始まりの図*3

泥海から陽気暮らしを導くための過程を示している。月日の神はここでの泥海は否定として扱われ、陽気暮らしが実現される場が肯定と考えられる。互いは対比の関係にある。日本の神殿や寺院では、神の空間を内陣、参拝者が入り込む空間を外陣と呼ぶが、否定の泥海は日常のよごれに浸された人間が入り込む外陣、陽気暮らしの体現として扱われる空間を内陣に当てはめることができる。

また、内陣を構成する要素に月日の神を設定する。ここで用いる「鏡」とは、天理教では円のことで汚れのない存在、つまり月日の神として現される。「鏡」は、教会の信仰の中心にあり、汚れのない天を映しだす。

内陣では、今は本部でしか行われていない「泥海古記」を建築空間と共に体現する。信者は繰り返し教会を訪れ、「泥海古記」の体現を通して、親神が示した陽気暮らしを実現することを目指す。

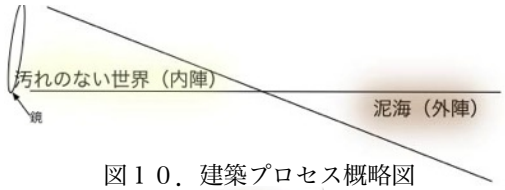


図１０．建築プロセス概略図

図１１．分教会の原型

3.1.2.天理教史の建築化

宗教建築は、原典の反映であるとともに、教祖のたどった道筋を追体験する空間装置でもある必要がある。その始まりを、何百年経った後も忘れてはならない。

天理教は立教まもない頃は異端として扱われ、信仰の停止を通達された経緯がある。それでも天命を貫き通し、細々ながら信仰を続けてきた。その歴史の内部空間化として、教会入口から長いスロープを伝って教会に到達するようにする。立教まもない当時の天理教の信仰の不自由さを表している。

また、外部からはそこに建築物には見えない地形のようなシェルに、緑を被覆した反建築的な形態にする。外部から弾圧された教会は緑の膜に覆われ、ひっそりと鎮座している。結果として、分教会はモニュメントではなく非建築的アイコンとして特異な存在を放つ。

図１２．神殿までの経路

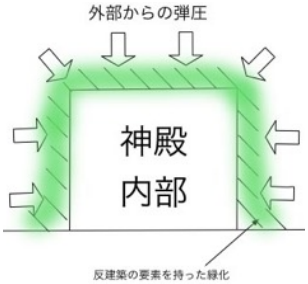


図１３．教会の簡易断面

3.2.御所ノ内地区での建築の形

3.2.1.他宗教との共存

御所ノ内地区は、住宅地に天理教他多数の宗教建築が隣接している地域となっている。アイコンとして教会は存在していなければならないとはいえ、単に目立つということは、宗教の理念からも他宗教との対立を生み出すことからも相応しくない。

天理教の受難の歴史の中で、他宗教と対立しないという言い伝えがある。実際のところ今日の天理教自体も他宗教・他宗を否定せず、また宗教の掛け持ちを許可している。天理教は他宗教との共存を立教以来模索してきた。

図１４に示した通り、将来のプロセスとして隣接した宗教と共存して作業ができる環境づくりを計画する。御所ノ内地区の宗教施設一帯が緑地化され、住民に開放された複合公共化を図

る。緑化事業を他宗教の信者と協働することによって、佇まいはもとより宗教同士の垣根を乗り越えることを将来の目標に掲げる。

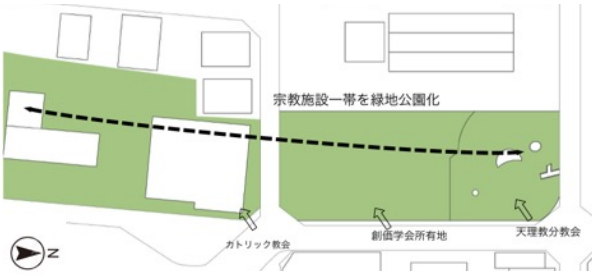


図１４．広域緑化図

3.2.2.現存建築の記憶の継承

現存住宅の歴史を残すため、プランニングと寸法はそのまま残しつつ、可能な限り部屋の削減をする。現存住宅の礎石は残して、削減した場所も礎石が浮き出るようにする。プランニングを残すことのメリットとして現存住宅の建材をそのまま再利用することができる。この操作で、「『貧』の形」をもつ減築を達成するだけでなく、コストを抑えることが可能となる。

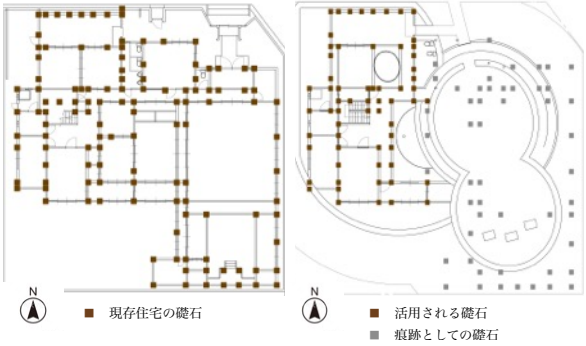


図１５．現存住宅平面礎石配置図　　図１６．計画住宅平面礎石配置図

3.2.3.建設風景の祭典化

建設は、建築物が作られる過程と捉えらえるが、その過程は見るものを惹きつけ、建物がその場に鎮座する事を発信する初めの形と考えられる。その風景と「ふしん」を重ね合わせる。建設にも宗教活動の入り込む余地がある。

本設計では、構造体にシェルを土型枠で施工し、その後土を解体し外部被覆の緑化を行う。土型枠のために土を運搬し、積み上げるなど、建築の精度に関わらない場合は、素人にでも建設可能である。その箇所は信者自らが施工する。この過程は「ふしん」のひとつの形となる。

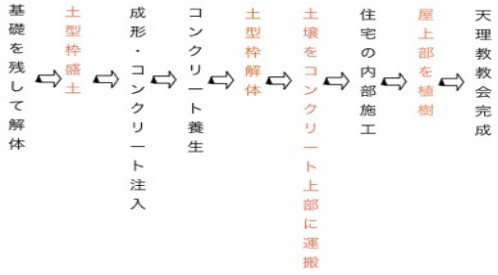
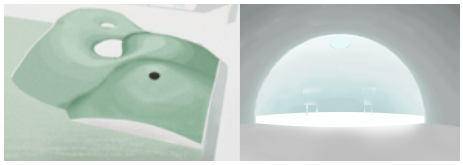


図１７．建設工程案（赤文字は信者介入で施工）

4.総括

本設計では、教義を建築に反映させる事によって宗教の理念と教会が結びつく建築が設計できた。地域のアイコンとして「『貧』の形」の理念を持つ天理教教会が存在することの提案ができたのは、天理教教会として大きな変革となりうるだろう。

本設計は天理教の分教会に対象を絞り、教会としてのあり方について考察し設計した。それは天理教に限らずすべての教会建築に必要な検証であると考えている。そのため、本設計のプロセスが、今後の教会建築の指針のひとつとなることを願っている。



5.参考文献

(1) 天理教ホームページ,<www.tenrikyo.or.jp>, 2015年11月15日取得
(2) 中山みき,おふでさき,天理教道友社
(3) 中山みき,みかぐらうた,天理教道友社
(4) 天理教同志会,おさしづ,天理教道友社
(5) 天理教教会本部(1949),天理教教典,天理教道友社
(6) 井上昭夫(2007),中山みき『元の理』を読み解く,株式会社日本地域社会研究所
(7) 井上昭夫(1990), 都市と宗教,天理やまと文化会議

6.引用元

*1 googleマップ,<www.google.co.jp/maps/@34.6014031,135.83484,16z>,2015年10月16日取得
*2 googleマップ,<www.google.co.jp/maps/@35.0409956,135.7338804,18z>,2015年10月16日取得
*3 井上昭夫(2007),中山みき『元の理』を読み解く,株式会社日本地域社会研究所